

セリバシオガマ *Pedicularis keiskei* Franch. et Sav.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 14。温帯性の植物で、愛知県は分布域の南限にあたる。県内では生育地、個体数ともに少ない。

【形態】

多年生草本。茎は根ぎわで分枝して直立し、高さ 25～35cm、花時には根出葉はない。葉は対生し、長さ 4～10mm の柄があり、葉身は卵状長楕円形で羽状に全裂し、長さ 4～8cm、幅 2～4cm、質は薄く、裂片は披針形で羽状に中裂する。花期は 8～9 月、花は上部の葉腋に 1 個ずつつき、花冠は筒部が淡緑色、裂片は白色で、長さ約 2cm、上唇は先が細長く嘴状にとがる。果実は蒴果で 3 角状披針形、鋭尖頭、長さ約 12mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根 (芹沢 77991, 2002-8-25)。西：20 足助(大多賀, 大原準之助 s.n., 1953-7-29) で採集された標本もある。

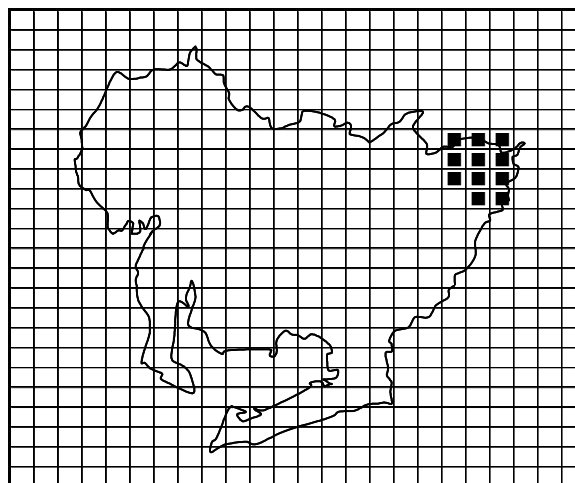
【国内の分布】

本州中部 (中央アルプス、南アルプス、八ヶ岳、秩父山地)。長野県では、それほど少ない植物ではない。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

通常は亜高山帯の針葉樹林内に生育する。愛知県の生育地はクロベ林内である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

隣接する長野県側にはまとまった群落があるが、愛知県側では生育範囲は限られており、個体数も少ない。過去の状態ははっきりしないが、おそらくは牧場の造成や観光開発により減少し、辛うじて残存しているものと思われる。

【保全上の留意点】

茶臼山周辺は、愛知県の中では希少な温帯性植物が集中して生育している場所である。自然とのふれあいの場を確保するという意味でも、現在以上の開発を避けるべきである。

【特記事項】

和名は、葉が細かく切れ込むからである。

【関連文献】

保草本 I p.135, 平草本III p.116, 平新版 5 p.157.